

Title	モルトマン (J.Moltmann)の三位一体論
Author(s)	金, 明容 高, 萬松・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55, 2013.3 : 344-372
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4680
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

モルトマン (J. Moltmann) の三位一体論

金 明 容

高 萬 松 ・ 訳

《訳者解説》

ソウル長老会神学大学校元総長・李鐘聲（一九二二—二〇一一）は『三位一体論』（一九九一年）という著書において、モルトマンの三位一体神学について二五頁を割いている。^①ここではモルトマンの三位一体論に対する評価として九つが挙げられていて、モルトマンの三位一体論に対して概ね肯定的に評価している。本翻訳と関わるものとしては、モルトマンの神学方法論が挙げられる。李鐘聲によればモルトマンの神学方法は、『テオリ』（*Theorie*）から『プラクシス』（*Praxis*）に行く伝統的方法を捨て、それとは反対の方法、つまり『プラクシス』から『テオリ』に行く方法を取っている。^②モルトマン神学における「実存的な性格」は、モルトマン自身の言葉に従えば妥当性に満ちている。というのはモルトマンが『神学的思考と諸経験』の冒頭で、「神学的実存」の意味を強調しているからである。^③上記九つの評価において李鐘聲はモルトマン神学を概ね高く評価しつつ、「このように長所があるにもかかわらずモルトマンに欠如しているのは、三・一

論の論理的根拠を提示していない」ことである、と指摘している。⁽⁴⁾

本翻訳の原論文の著者・金明容は李鐘聲の次世代の神学者である。前述の「実存的」方法論に注目して見れば、本紀要五四号の金明容「モルトマン (J. Moltmann) 神学の貢献と論争点」においても論じられているように、金明容はモルトマンの三位一体論における「神学の実践性」を高く評価している。⁽⁵⁾ 本翻訳の第五章の冒頭で「モルトマンの社会的三位一体論は、それ自体で三位一体神学の歴史に大きな分かれ道を作ったという意味を持っているが、さらに実践的領域においても影響力が大きい」と述べられている。本翻訳においてもモルトマンにおける「神学の実践性」を読むことができると思われる。

今回は、長老会神学大学校教授論文集である『長神論壇』(第一七集、二〇〇一年)所収の論文「モルトマンの三位一体論」を、著者の許諾の下で翻訳した。⁽⁶⁾ 翻訳にあたり、外国語に対する訳語が日韓それぞれが、同じ漢字圏における日・韓の間での訳語の選択はさらに難しい。例えば、テルトゥリアヌスの (una substantia—tres personae) という言葉に対する訳語である。韓国の神学者たちにおいても統一されていない傾向が見られる。まず、李鐘聲はそれを「一つの本体と三つの位格」⁽⁷⁾ (하나의본체와세위격) と訳している。本翻訳の基となる韓国語論文では「一つの本体と三つの役割」(하나의본체와세가지역할) となっている。⁽⁸⁾ そしてモルトマンの弟子で元延世大学の組織神学教授・金均鎮は「一つの実体—三つの品格」(하나의실체와세품격) という言葉を用いている。⁽⁹⁾ 反面、邦訳では「一つの実体—三つの位格」と訳されている。⁽¹⁰⁾ これ以外にも、ドイツ語に対する日・韓両国の表現の違いがあつて、本翻訳ではできる限り両方を「原注」に付記して示すこととした。訳者の補語は「」を付して示した。

注

- (1) 李鐘聲『三位一体論』大韓基督敎出版社、一九九一年、六五七―六八一頁。
- (2) 同上書、六七九頁。
- (3) J・モルトマン、沖野政弘訳『神学的思考の諸経験』新敎出版社、二〇〇一年、二八頁。
- (4) 李鐘聲、前掲書、六八二頁。
- (5) 金明容「モルトマン (J. Moltmann) 神学の貢献と論争点」、高萬松訳、『聖学院大学総合研究所紀要』五四号、二〇一三年、二四二―二六六頁。
- (6) 金明容「モルトマン (J. Moltmann) の三位一体論」、『長神論壇』第一七集、二〇〇一年、一五九―一八五頁。
- (7) 李鐘聲、前掲書、六八〇頁。
- (8) 金明容はこの訳語にモルトマンの思想を反映していると思われる。原注3を参照されたい。
- (9) J・モルトマン、金均鎮訳『神学の方法と形式』大韓基督敎書会、二〇一一年、三四一頁。
- (10) J・モルトマン、土屋清訳『三位一体と神の国』新敎出版社、一九九〇年、二三〇頁。

一、序

韓国の多数の信徒たちは、三位一体論が人の理解できない神的なものに見なしている。というのは神が三つでありながら一つだと考えるからである。三位一体論は人間の理性の限界を超えている三つが一つとなり、一つが三つとなるという神の存在の神秘であるので、人間の理性がこれを把握し説明することは根本的に無理だと考えている。しかし三位一体論は本当に一つが三つとなり、三つが一つとなるという、理性で理解できない何かを説明する教理であつたらうか。

モルトマン (J. Molmann) は一九八〇年『三位一体と神の国 (Trinität und Reich Gottes)』⁽¹⁾という、二〇世紀後半で三位一体論研究における不朽の名作を出版し、到底理解できなかった三位一体論に画期的な転機をもたらした。それ以降モルトマンは一九九一年『三位一体と神の歴史』 (In der Geschichte des dreieinigen Gottes) を出版し、⁽²⁾『三位一体と神の国』という著書でその骨組みが表れた彼の三位一体論をさらに豊かにし、彼の三位一体論を完成させた。モルトマンの三位一体論は今日の世界神学界の三位一体論研究の発展の契機となり、理解できなかった三位一体論を理解できる三位一体論に変えた。では、モルトマンによつて作られた三位一体論の核心的骨組みの内容は何であろうか。

二、三位である神

モルトマンの三位一体論において神の三位とは神が三つだということである。神は御父と御子と聖霊とおられるので、神は三つである。神が三つであるということが今日の西方教会神学の伝統に立つ多くの教会と多くの信者たちを当惑させる言葉であると聞こえるかも知れないが、モルトマンによれば神は確かに三つであり、正しい三位一体論はこの三つの神々から出発すべきである。

西方教会神学は一般的に神が一つであるという前提から出発する。西方教会の三位一体神学の礎を築いたテルトゥリアヌス (Tertullian) は三位一体の図式を「一つの本体と三つの役割」(una substantia—tres personae) と定義した。モルトマンによればこのテルトゥリアヌスの図式は最も様態論的傾向を持つ図式で間違つたものである。⁽³⁾テルトゥリアヌスの図式で役割の意味を持つ「ペルゾナ」(persona) は、今日のラテン語では人格を持つ個体を意味しているが、テルトゥリアヌス時代には人格を持つ個体の意味よりむしろ舞台の上で俳優たちが役割を演じる時に「ペルゾナ」という単語を用いた。したがってこの単語はテルトゥリアヌス時代「に用いられた」の人格を持つ個体より、仮面あるいは役割と訳すべきである。それゆえテルトゥリアヌスは神が一人で一つの本体を持つお方で、この一つの本体が三つの顔として現れるという意味と理解したのである。このようなテルトゥリアヌスの思考は様態論異端に相当に近づいており、これを批判したモルトマンの論は正当と見なすべきであろう。

西方教会の三位一体論の体系をほとんど形づくつたアウグスティヌス (Augustinus) は神の三位ということに関係 (Relation) と理解した。すなわち、アウグスティヌスは御父、御子、聖霊が個体で既に存在していて、個体で存在し

ている三つがある関係を持つていると考えたのではなく、一つの神が自分の中での分離を通して相互間の関係を結んでいる時「の意味で」、それが御父、御子、聖霊だということである。モルトマンによれば、既に存在している個性が抜けて関係のみ残っている三位一体神学は、一神論の変種にすぎず、間違った三位一体論である。

二〇世紀のプロテスタントとカトリック神学を代表するカール・バルト(K. Barth)とカール・ラーナー(K. Rahner)の三位一体論も、やはりモルトマンによれば、様態論的傾向を持つ誤った三位一体論である。⁽⁴⁾バルトの三位一体の図式である「一つの人格体―三つの存在様態」(1 Person-3 Seinsweise)において「三つの存在様態」は結局一人の神の存在の仕方が三つだという意味なので様態論の批判を免れがたい。ラーナーの三位一体の図式「一つの人格体―三つの存在様態」(1 Person-3 Substanzweise)も、テルトウリアヌスが既に言及したように、一つの本体が三つの顔として現れるという意味と類似しているもので、テルトウリアヌスの三位一体神学の繰り返しにすぎない。

モルトマンによれば西方教会の三位一体論の根本的誤謬は、神が一つであると固く信じ、一つの神から出発して三つの神々の姿を表現しようとする誤った出発にある。モルトマンによれば神が一人であるという前提は哲学的前提であり自然神学的前提であるが、非聖書的で、イエス・キリストの歴史に基づいた思索ではない。モルトマンによれば正しい三位一体論を展開するためには、イエス・キリストの啓示の歴史に基づいて、徹底的に聖書的でなければならぬ。

モルトマンによればイエス・キリストの歴史において捉えられる神は一つではなく三つである。モルトマンによればイエスが洗礼を受ける場面では既に三位一体を構成する神の三つの姿が明確に表れる。「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、『これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である』」(マタイ三・一六―一七、口語訳)。モルトマンによれば新約聖書は御父と御子と聖霊、すなわち、神の三つの姿を明白に示してくれる。イエスは天におられる神に祈り、ゲッセマネの園では「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさつて下

さい」(マタイ二六・三九)と祈った。御父の神とイエス・キリストは異なる方である。新約聖書は、「父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施す」(マタイ二八・一九)と命じ、この三位の神の名によって洗礼を施した場が三位一体神学の場である。

モルトマンによれば西方教会の神学とは違って相対的に、東方教会の神学は神の三つなることをよく知っていた。モルトマンによれば東方教会の三位一体神学は一つの神から出発せず、三位の神から出発する神学であった。東方教会の三位一体の図式である「一つのウシア―三つのヒュポスタシス」(Iousia-3 Hypostasis)で「ヒュポスタシス」は独立した個体を意味するとモルトマンは見ている。すなわち、東方教会は神の三つなることを自然に受け入れており、この三位の神がどうして一つかという問いにおいて三位一体論が形成された。モルトマンによれば、東方教会の三位一体論が西方教会の三位一体論より聖書的であり、真理を多く含んでいる三位一体論である。

三、三位の神の一体性

三位の神の一体性を理解する時に、まず間違ったことを直す必要がある。既述のように、神を一人と前提し神の三つなることに言及することは、三位の神の一つなることが、神の一つだという前提にあるもので、これは様態論的傾向を持つ間違った認識である。またこれは、場合によっては一つの人格的神が三つの頭を携えている体と連想させる可能性がある。三位の神の一体性を理解するときに、もう一つの誤った認識は、神が三つであると同時に一つだと告白する仕方である。モルトマンによれば神が三つであり一つと告白する最近の代表的神学者はグレスハーケ(G. Grethake)である。グレスハーケは『ひとりの三一の神』(Der dreieine Gott)という本を一九九七年に出版している。モルトマン

によればこのような思考の仕方は神の一つなることを三位の神の個体的人格性と同じ次元に置くものなので、間違っている。⁽⁸⁾

モルトマンによれば、三位の神の一体性は御父と聖霊が御子と共にいて「御子の」内において、御父と御子が聖霊と共にいて「聖霊の」内において、また聖霊と御子が御父の内において「御父と」共にいる三つの神々の「ペリコレスス」(perichoresis) 的な生の内にある。モルトマンは次のように言っている。⁽⁹⁾

ヨハネによるイエスは次のように語っている。「わたしを見た者は父を見たのである」。「わたしと父とは一つである」。「わたしが父の内において、父がわたしの内におられる(ヨハネ一四・九、一〇・三〇、一四・一一)。「わたし」と「あなた」、「私たち」と「私たちを」という表現が理解させてくれるように、イエスと父なる神は人格的に互いに向かつて関係している。イエスと父なる神の一体性「韓国語では、統一性」は、前提されるのではなく、相互内住を通じて、イエスと父なる神御自身によって形成される。この一体性の相互内住「韓国語では、ペリコレスス」的なかたちが、唯一考えることのできる三位一体の神の一体性の三位一体的理解である。

モルトマンによれば三位の神が一つなることが三位一体ではなく、三位の神がペリコレスス(循環あるいは浸透)的存在の仕方を通して相手の内に浸透しておられ、相手と共におられる三位の神の独特な生の姿を説明することが三位一体論である。神が神となるということこそ、この三位の神のペリコレスス的な生にある。モルトマンは次のように神のこのペリコレスス的な生をさらに詳細に説明している。⁽¹⁰⁾

ニカイア信仰告白が言うように、神的な人格は互いと共に (*miinander*) 存在し、一緒に互いに捧まれ尊重される。これらは自分の人格的独特性を除けば全てを共有する。神的な人格は互いのために (*firinander*) 存在する。父は子のために存在し、子は父のために存在し、聖霊は父と子のために存在する。これらは互いのために完全な代理を遂行する。それゆえこれらは結局互いの内で (*ineinander*) 存在する。フロレンス公議会は次のように言う。「この一致のゆえに父は全的に子の内におり、全的に聖霊の内にいる。そして子は全的に父の内におり、全的に聖霊の内にいる。そして聖霊は全的に父の内におり、全的に子の内にいる」。これらは互いに浸透するので、これらは互いの内に存在し、交互に内住する。

モルトマンによれば三位一体の神の各々の人格体は、異なる人格体の生の空間であり、安息と喜びの場である。それと同時に各々の人格体は異なる人格体において自分の真の喜びと生の意味を得る。

どの位格「韓国語では人格体」も御自身の外に、他の二つの位格において脱目的に存在している。それは、各位格が御自身から出て行かれ全く他の位格において現臨される、完全な愛の力である。このことは、逆に、各三位一体の位格は位格であるのみでなく、同時に他の兩位格にとつての、生活空間を表わしていることを意味している。各位格は相互内住において、他の兩位格の浸透・住まわせ (*circummissio*) の意味である。このように人は三位一体の三位格についてばかりでなく、相互に存在しあっている三つの三位一体的空間についても同時に語らなければならない。各位格は積極的に二つの他の位格に内住しながら、受容的に二つの他の位格に空間を与えている。それゆえ同時に御自身を与えながら他を受容している。神の存在は位格的に現存在であり、社会的共存在であり、相互内在的「韓国語ではペリコレシス的」に理解さ

れる内一存在である。⁽¹¹⁾

モルトマンによれば三位の神は深い愛の力で他の人格体と共におられ、また他の人格体の内におられながら一つとなる。そしてこの深い愛の交わりの中で三位の神の各人格体は自分の存在を見つける。「三位一体の位格は自己なき愛の力によって、互いの中で御自身へと至る。子と霊において父は御自身へと至り、御自身を父として意識される。父と霊において御子は御自身へと至り、御自身を子として意識される。父と子において聖霊は御自身へと至り、御自身を霊として意識される⁽¹²⁾」。モルトマンによればペリコレススが三位の神の一体性を形成するが、同時にペリコレススは三位の神の個性も形成する⁽¹³⁾。御父も御子と深い愛のペリコレススにおいて御子と一つであると同時に自分が父であるということも明白に認識しそこで喜びを感じ、御子も御父との深い愛のペリコレススにおいて御父の神と一つなることを感じると同時に、自分が子であることを明白に認識し、そこで喜びを感じる。これは聖霊の場合も同じである。それゆえペリコレススは三位の神の一つなることを表す概念であると同時に三位の神の個性を確立しつつ、神的な生の愛の交わりを意味する言葉である。

モルトマンはこのような神的ペリコレススのな生に基づいた自分の三位一体論を社会的三位一体論 (Soziale Trinitätslehre) と呼んだ。モルトマンによれば東方教会神学の三位一体論も本質的に社会的三位一体論であった。「東方教会神学も三位一体の神の一体性を交わりと理解するのに問題点はなかった。既に偉大なカッパドキアの教父たちもそのように理解した⁽¹⁴⁾」。モルトマンによれば東方教会の三位一体神学の教父たちは神の一つなることを三位の神のペリコレススのな生と交わりと理解し、神の体が一つなるとか、一つの神が三つと現れると誰も考えなかった。モルトマンによれば三位の神は一つ (einig) であつて、一人 (einer) ではなかった。

モルトマンによれば社会的三位一体論は神が三つであると前提し、この三位の神がペリコレススの仕方であつて

(einig) だと説明する三位一体論である。この三位一体論はモルトマンが一九七二年に『十字架につけられた神』(Der gekreuzigte Gott) を書いた時に既にその骨組みが作られており⁽¹⁵⁾、一九八〇年の『三位一体と神の国』(Trinität und Reich Gottes) を出版した時にはその体系が明白になった三位一体論である。一九八〇年の『三位一体と神の国』の出版以降、モルトマンの三位一体論は嵐のような衝撃と影響を世界各地に及ぼし、三位一体神学研究に火をつけた。レオナルド・ボフ(L. Boff)はモルトマンの三位一体論に対して肯定し⁽¹⁶⁾、社会的プログラムとしての三位一体神学的重要性を主張した。ミロスラフ・ヴォルフ(M. Volf)はモルトマンの社会的三位一体論を教会論に適用した重要な著述を残した⁽¹⁷⁾。

しかしモルトマンの社会的三位一体論に対抗する批判も登場した。モルトマンの社会的三位一体論に対する批判はほとんど彼の三位一体論が三神論だということに集中している。グレスハーケ(G. Greshake)はモルトマンの三位一体論が三神論的傾向を持つていると強く批判した⁽¹⁸⁾。しかしながらモルトマンの社会的三位一体論が三神論であるか、あるいは正しい三位一体論であるかはさらに研究すべきであろう。

しかしまず我々は、西方教会の一神論的三位一体論から早く解放されるべきである。というのは三位一体論が古代教会で一神論異端との対立の中で形成された教理であったからである。古代教会が力強く行ったことは、神の三つなることを否定しようとするあらゆる説を異端と規定することであった。古代教会の正統的諸信条は神が御父と御子と聖霊としておられ、この三位の神が各々同格の神であると宣言する信条であった。三位一体論において西方教会に比べて相対的にさらに高い正統性を携えた東方教会の神学の教父たちは神が三つであることを疑わず、この東方教会の正統的神学の教父たちが彼らの反対者たちによって絶え間なく三神論で批判を受けていたという点は記憶すべきである。すなわち、三位一体論の土台を築いたカッパドキアの神学の教父たちをはじめとする神学の教父たちが一神論的異端によって三神論者だという非難を受けていたという点である。しかし、カッパドキアの教父たちにとって神が三つであるという

ことと、二つの神々 (3 gods) があつたこと(う)とは根本的に異なる言葉であつた。というのは神の三つなることは、一つの神の神性における三つの実体 (hypostasis)、すなわち、人格体を意味する言葉であつたからである。それゆゑ三位一体論で三位を三つの人格体 (3 persons) と表現することは正しいが、三つの神々 (3 gods) と表現することは間違ひである。モルトマンはこの問題に対して次のように言及している。⁽¹⁹⁾

三位一体的神学の討論において、三神論の非難は決して実質的根拠をもっていない。「三つの神々」説を主張したキリスト教神学者は決していなかったからである。この非難は古い、まず最初にアリウス派のそれからイスラム教の、正統なキリスト教世界に対する非難であつた。後にこの非難は、東方正教会の神学に対する西方教会の非難になつた。今日のこの批判は、自らの近代的様態論を隠すのに用いられる。イスラム教的唯一神論の展望からするならば、しかしすべてのキリスト教神学者たちは——アウグスティヌスあるいはトマス、バルトあるいはラーナー、パネンベルクあるいはグレスハーケ等——キリストの神の子性に固執し神を「イエス・キリストの父」と呼ぶかぎり、「三神論者たち」である。

イスラム教の唯一神を信じる人々の眼には、全てのキリスト教信者が三神論者たちであろう。そして様態論やこれと類似な理論を信奉する異端たちの観点では、カッパドキアの教父たちをはじめとする東方教会の三位一体神学者たちとモルトマンは三神論者たちであろう。しかし東西教会の唯一の正統信条であるニカイア—コンスタンティノポリス信条(三八一年)と聖書の教える三位の神に対する神学的観点で見ると、モルトマンの三位一体論は三神論ではなく、正しい道の上に立つ三位一体論と評価すべきであろう。

四、聖霊の母としての役目

(一) 聖霊の母としての役目は可能であろうか

御父「である」神を父と、聖霊「である」神を母と、そして御子「である」イエス・キリストを子と表現できるかという問題は、モルトマンの三位一体論における興味深い主題である。聖霊の母としての役目は既に古代教会で東方教会の神学の父たちによって言及されたことがある。シリアの神父たちと、後期にはエチオピア神父たちも、三位一体論を説明する時に、聖霊の母としての役目に言及し、聖霊の母としての役目と共に家族的三位一体論に言及したことがある。

聖霊の母としての役目はドイツの敬虔主義運動と、敬虔主義神学の父であるツインツェンドルフ (N. G. Zinzendorf) によっても力強く説教に反映された。ツインツェンドルフは次のように言った。「我々の主イエス・キリストの父は我々の真の父であり、イエス・キリストの霊は我々の真の母である。そして生きておられる神の子、彼の独り子は我々の真の兄弟である」⁽²⁰⁾。モルトマンはこのようなツインツェンドルフの三位一体論について相当肯定している⁽²¹⁾。

しかしモルトマンが聖霊の母としての役目を受容し、これを主張しているかという問題をめぐるのはさらに細かな研究を要する。というのは、この問題に対するモルトマン自身の言葉における不一致が表れるからである。モルトマンは神に父性的側面と母性的側面が共存しているという点に関して少しも疑わず、むしろそれを強調している。モルトマンにとって神を男性である父としてのみ表現するのは間違いである。父権制は多くの場合、男性である父なる神に対する

認識と結びついている。神の本性に女性「という」性がないのは、女性を男性に比べて劣等な存在とする可能性と結びついている。そのため、多くの女性神学者たちは父なる神を母なる神と言い表し、イエス・キリストを我々の姉妹と表現する。父なる神を母なる神と表現するのは、父なる神を両性的存在として、あるいは、性を超える存在として認識しようとする意志の表れである。

父なる神を母なる神と表現しようとする女性神学者たちの志に対して、モルトマンは、「母のような父と、彼の慈悲の力」という文章においてかなり肯定している。「神の慈悲は母なる姿においても説明できる（イザヤ六六・一三）。主なる神は父のように、そして母のように行動し」、さらにモルトマンは次のような重要な表現を用いている。「子を出産し誕生させる父は決して男性的な父だけではない。彼は母のような父である。彼は男性的に男と理解されうるのではなく、両性的に、あるいは、性を超えるものと理解すべきである。彼は唯一産まれた彼の子の父性的な父であり、同時に唯一産まれた彼の子の母性的な父にもなる。この観点でモルトマンは、「子が無から、あるいは、ある実体から創造されたのではなく、父の母体から、換言すれば、彼の存在から出産され誕生したという事実を我々は信じるべきである」というトレド公議会（六七五年）の表現をとても肯定的に用いている²⁴。

上述の文章においてモルトマンは「母のような父」という表現で、父なる神の一方的な男性像に制動をかけ、父なる神に対する両性的な陳述の可能性が妥当かつ有益だという見方を表したと思われる。続いてモルトマンはその有益性について次のように言う。「この両性的な陳述は父権的一神論に対する拒否にならざるを得ないという帰結に至る。天の父の一神論は父系社会の宗教であって、今もそうである。これを見る限り母の地の汎神論は以前の母系社会の宗教であったと推察できるであろう。キリスト教の三位一体論は母のような父と、神の身ごもる慈悲についての陳述として、神理解における一般的男性的比喩の言葉を克服するきっかけを提供する²⁵」。この文章でモルトマンの強調点は、父なる神が母のような特性を持つ両性的な陳述の可能な父であり、この父は父権制の宗教とは無関係だということである。

このようなモルトマンの父権制の宗教を克服しようとする努力と、性の差別の克服のために父なる神に対して両性的陳述をすることが可能であるというとは理解できる。問題は、父なる神に両性的陳述をする時に、聖霊なる神の母としての役目が無意味になる可能性が残るという点である。神を一神論的に理解して御父なる神ひとりのみと仮定する時に、御父なる神が父でもあり母でもあるか、あるいは、御父なる神が性を超えるお方である場合に、女性神学者たちの主張する観点に対して神論的に裏付けられる。しかし三位一体神学的に見て、御父なる神に相応する聖霊なる神の母としての役目を仮定する時に、わざわざ御父なる神の母性という性を強調する必要がない。むしろ男と女で創造された世界は御父なる神の父なることと、聖霊なる神の父の母なることと相応でき、三位一体神学が強調する御父と聖霊の同性は男と女の同性とよく調和できる。

ではモルトマンは聖霊の母としての役目についてどのように考えているのであろうか。まず我々が聖霊の母としての役目について詳細に論じる前にここで注意すべきことは、モルトマンが「母のような父と彼の慈悲の力」という文章で御父を「両性的に、あるいは、性を超える」存在と言及したが、このような「両性的に、あるいは、性を超える」存在について後の文章で取り扱われているという点である。まずイエス像についてのモルトマンの見方を見よう。「一九世紀のプロテスタント自由主義的思想のイエス像も救済者の無罪性の背後に常に男性的属性と女性的属性の調和のある統一、すなわち、アニムス (animus) とアニマ (anima) との一致を見た。しかし両性的な人格性は性の問題を解決できるのか。これは全てが自ら完全なものとして、誰も他のどういふものも必要としないというふうには、この問題を個人主義的に解決するのではないか。キリスト者となった人間はキリストに似ることによつて、実に両性的な人間にならうか。否、女性なることと、男性なることは、分けて生かす霊の特別で多様な賜物ではないか」⁽²⁶⁾。モルトマンは前記箇所の載っている『三位一体と神の歴史』の序文で、イエス像における男性と女性という両性的な人格性を探る一九世紀自由主義思想に明らかに反対している。これは論理的に父なる神から両性を探り、イエス・キリストからも両性を探ってい

今日の？女性神学的流れへの反対の表明である。さらにこれは神から性を超えるティリッヒ (R. Tillich) などの「存在と根源」あるいは「存在そのもの」という思考も拒否する表現である。モルトマンによれば性の廃棄や合一、あるいは、性の超越が問題に対する答えではない。モルトマンは「三位一体のすべての位格において女性的側面」⁽²⁷⁾を探ろうとした女性神学に対して肯定を表していない。モルトマンによれば聖霊において男性的側面と女性的側面を見つけようとする努力するより、女性的側面を見つけようとするのが正しい道である。「聖霊と関連して言えば、我々は単に元来のヤハウェのルーアハに戻ってその女性的側面を見つめる。ニカリア信仰告白が聖霊を支配する者と生かす者 (dominum et vivificantem) と呼ぶ時、これは解放させる主と生かす母を意味する」⁽²⁸⁾。そうだとすれば、モルトマンは一方では両性的陳述に対して肯定を表し、他方では両性的陳述に対して否定を表しているが、これは矛盾ではないか。

無論相互矛盾である。父なる神に両性的特徴を付与し、聖霊の母としての役目を強調することには矛盾がある。モルトマンはこの矛盾を克服するために『三位一体と神の歴史』の序文で、「慈悲の父は母性的な父である」⁽²⁹⁾という言葉をもつてそれを解決しようとした。このような表現の意図は、御父なる神は父であるが、母のような慈悲を携えている父だという意味である。すなわち、御父には男性性を、聖霊の父には女性性を与え、性の区分は明確にするが、父は恐怖の対象ではなく慈悲の神であり、母のような慈愛を携えた慈悲の神だという意味である。この言葉は結果的に「母のような父と、彼の慈悲の力」という文章で述べた両性的な母のような父を、読者たちがその矛盾と差異をあまり感じとれないように、部分的にその意味を修正して伝えたものである。

我々は今までモルトマンが彼の三位一体論で母性「という」性と女性「という」性を御父なる神に適用しているか、あるいは聖霊なる神に適用しているかという問題を扱った。一見、モルトマンは両方に適用しているように見えるが、モルトマンは彼の三位一体論を發展させ漸進的に、母性「という」性と女性「という」性を聖霊なる神に適用し、御父なる神が父であつて怖い神でなく母のような慈愛を携えている慈悲の神と見ている、とまとめられる。

ではモルトマンは本当に聖霊なる神に女性「という」性と母としての役目を与えているのか。今まで我々はそうだと
言つて、具体的にモルトマンの文章から検証していなかった。モルトマンによれば聖霊を意味する単語がラテン語やド
イツ語では男性名詞であるが、それは元来の性を誤つて翻訳したものである。旧約聖書に出てくる聖霊を指すヤハウエ
のルーアハは女性であり女性名詞であつた。モルトマンは次のように述べている。「聖霊の交わりにおいて支配や従属
の秩序のない人間の交わり、愛によつて解放された男と女との交わりができる。このような交わりを以前より深く理
解するためには、古くなつているが時には抑圧され、度々忘れられた聖霊論的思想、すなわち、聖霊の母としての役目
を再び受け入れることが有益であろう」⁽³⁰⁾。聖霊の「母」としての「像は他の像よりさらに明確に聖霊の人格性を把握で
きるようにする」⁽³¹⁾。モルトマンの聖霊の女性「としての」性と母としての役目のために次のような多くの伝統を挙げて
いる。「シリアと、いわばグノーシス主義的共同体のキリスト教伝統によれば聖霊は彼の存在と活動において神の女性
の秘密を持つている。外典であるヘブル人福音書ではイエスを聖霊の子と呼んでおり、ヤハウエのルーアハは『私の子
よ、私はすべての預言者たちからあなたが来ることを、そして私があなたにおいて安息することを願つていた』と言
う。トマス福音書ではさらに正確に言えば『聖なる女性の霊』を『創造の母』と『我々と共に苦しめられる母』と呼ん
でいる。シリアの教父たちは聖霊を二つの理由で『我々の母』と呼んでいる。第一は母が子供を慰めるように、助け主
は慰める。第二は信者が聖霊から新しく『生まれる』。実に聖霊が初めて生まれた子イエスの本来の母であるように、
信徒たちの慈悲の母である」⁽³²⁾。モルトマンによればヘブル人の伝統では知恵やルーアハが本質的に女性であることと同
じように、カバラ伝統によれば霊は「神性の内での女性的原理」(feminine principle in the deity)である⁽³³⁾。シリアの教
父マカリオス (Makarios) は「聖霊は我々の母である」と定義した、とモルトマンは想起させる⁽³⁴⁾。

モルトマンによれば神には父性的本性があるように、これに相応する母性的本性がある⁽³⁵⁾。この母性的本性は聖霊と深
く関わっている。それゆえ聖霊の母としての役目を受け入れることは正しいことで有益である。モルトマンのこのよう

な聖霊の母としての役目はカトリック教会のマリア (Maria) を天の母と見なすことと対立させて見る必要がある。モルトマンによれば聖霊を天の母と呼ぶことは可能であるが、マリアを天の母と呼ぶことは不可能である。教会の真の母はマリアではなく、聖霊である。聖霊は神の女性的母性的属性で人間と世を救い、解放し、一つに連合させる。

(2) 聖霊の母としての役目と聖霊の発出

聖霊が父から出るか、父と子から出るかという問題は、一〇五四年東西教会の分裂に繋がった有名な論争であった。この問題に対するモルトマンの答えはフィリオクエ (Filioque) に言及した西方教会の間違いであると結論づけている。西方教会が「子から」を付け加えたことは三八一年ニカイア―コンスタンティノポリス信条の元来の形態に合わないだけではなく、三位一体論の発展を大きく阻害した誤りだとモルトマンは見ている。⁽³⁶⁾

モルトマンによれば聖霊はもっぱら父から出る。聖霊が子から出るならば聖霊は子に従属する可能性が高く、事実、西方の三位一体論によれば聖霊が子に従属する傾向がとても高い。聖霊が子に従属し聖霊が子から出るならば、聖霊の母としての役目は根本的に不可能となる。モルトマンは、御父を第一位と、御子を第二位と、聖霊を第三位と呼んでこのような順序を作ったことも西欧の三位一体神学の問題点として理解している。なぜ聖霊は神の第三番目の位格であるべきか。この問題に対する神学的・聖書の根拠はモルトマンに従えばない。モルトマンによれば聖霊は御父から出ただけで、聖霊の発出は御父と御子からではない。

しかしながら、モルトマンは聖霊が御父から出たというギリシャ教父たちと東方正教会の教えを無批判的に受け入れているのではないか、という質問がボウカム (R. Bauckham) によつて提起された。ボウカムはギリシャ教父たちと東方正教会の、聖霊が御父から出たという根拠のために用いられているヨハネ一五章二六節のテキストは今日の聖書学で

見るならば、三位の神の始まりと関連のある内在的三位一体の関係性に触れているのではなく、経緯的三位一体の歴史と関連した意味において御父が聖霊を遣わしたという意味だけなので、三位の神の始まりと結びついた聖霊の発出を意味する根拠としては用いられないという見解を表している。⁽³⁷⁾

ボウカムによれば「明らかにモルトマンはこの問題であまりにも伝統を重んじて伝統に沈んだ犠牲者となっている」。⁽³⁸⁾モルトマンの三位一体論は御父なる神によつて主導される君主的三位一体論を拒否し、御父と御子と聖霊が愛のコイノニアを通して形成する社会的三位一体論である。それならばこの社会的三位一体論は三位一体の経緯的な生だけに当てはまるのか。モルトマンの三位一体論によれば内在的三位一体と経緯的三位一体の間には差はない。モルトマンは内在的三位一体が経緯的三位一体であるという神学的眼目を持っており、この神学的眼目は正しい。しかし内在的三位一体と経緯的三位一体が同じであっても、その三位一体の生の始まりにおいて、聖霊が御父から出て、御子は御父から出生したとすれば、もう一つの君主的三位一体が作られるのではないか。東方正教会とギリシャ教父たちが教えた聖霊が御父から始まったということは再検討の必要性のない絶対的真理であろうか。

五、三位一体神と世界

モルトマンの社会的三位一体論は、それ自体で三位一体神学の歴史に大きな分かれ道を作ったという意味を持っているが、さらに実践的領域においても影響力が大きい。神を三位一体の神と認識し、特にその三位一体を社会的三位一体と認識した時に、その結果派生する神学的影響は何であろうか。

(1) 社会的三位一体論と三位一体論的人間論

ナジアンゾスのグレゴリウス (Gregory of Nazianz) は三位一体の神の地上の姿の類比として、アダムとエバとセツという一つの核家族に言及した。ナジアンゾスのグレゴリウスによれば、アダムとエバとセツという一つの核家族は無論三位一体の神と質的に違うが、地上では見つけることのできない最も近い三位一体の神の類比と考えている。ナジアンゾスのグレゴリウスは三位一体の神を社会的三位一体と認識しており、この神の社会的三位一体の地上の姿がアダムとエバとセツという一つの核家族の関わっている愛と交わりと親交と見たのである。

ナジアンゾスのグレゴリウスをはじめとする東方教会の三位一体論は、モルトマンによれば社会的三位一体論であった。⁽³⁹⁾ しかしこの社会的三位一体に強く反対した人がアウグスティヌス (Augustinus) であつた。⁽⁴⁰⁾ アウグスティヌスは男のみが神の姿と見て、神の姿が性的関係と結ばれることを断固反対した。アウグスティヌスによれば夫が神の栄光であり姿であり、女は男から一段階劣っている意味での夫の栄光だけである。女はそれ自体としては神の姿とならず、もっぱら夫と共にする時のみ、神の姿となる。なぜなら女は男の助け手として創造されたからである。⁽⁴⁰⁾

神の姿において女を除外したアウグスティヌスはさらに一步進んで男から肉体を除外した靈魂のみが神の姿だと主張した。アウグスティヌスによれば人間の靈的特性が神の姿である。アウグスティヌスによれば靈魂のみが神と交わり、この靈魂が肉体の主人であるため、靈魂のみが地上での神の姿となる。神は統治者で、世と結びついているので、肉体を統治する靈魂が神の姿であり、女を治める男が神の姿である。⁽⁴¹⁾

モルトマンによればこのようなアウグスティヌスの神の姿に対する理解は聖書の神の姿に対する致命的な誤解である。創世記一章二六―二八節によれば神は我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう、として男と女を創造した。す

なわち、地上での神の姿は男と女の性的差異と関係性において存在する。「祭司文書の創造物語が男と女の創造に対する地上での神の姿の創造であるならば、男と女の間の根源的違いと共同体的特性は根本的に神の姿という観点で理解すべきであろう⁽⁴²⁾」。モルトマンによれば女なしの孤独な男が神の姿ではない。また隣人のない孤独な人間も神の姿ではない。「神に相応するもの、神の永遠の存在に参与するのは孤独な個人や性的関係の排除された霊魂ではない。人間相互間の交わりが神に相応する生であり、神の永遠の存在と関わる生である。したがって我々はここで必然的に東方教会の教父たちから見出される社会的な神の姿に関する議論に戻らざるを得ない⁽⁴³⁾」。

モルトマンによれば神の姿を論じるに当たって肉体を外すことはあつてはならない。というのは、霊魂と肉体とで構成されている人間が神の姿だからであり、パウロによれば肉体が聖霊の内住する宮だからである⁽⁴⁴⁾。モルトマンは、アウグスティヌスの精神を継承して霊魂が神の姿の場と主張したカルヴァン (Calvin) を批判し、宗教改革時代に神の姿についての論争で肉体が神の姿の一部だと主張したオジアンダー (Andreas Osiander) の主張を肯定した⁽⁴⁵⁾。モルトマンによれば見えない神の姿であるキリストは肉から来られた人間であつた。男が女を支配し、霊魂が肉体を支配することが三位一体の神の地上の姿ではなく、モルトマンによれば男と女に創造された人間が神の姿であり、この人間相互間の深い愛の交わりが神の姿である。しかしモルトマンはアダム、エバ、セツと繋がる一つの核家族を神の姿と見たナジアンゾスのグレゴリウスの見方に対しては完全に同意してはいない⁽⁴⁶⁾。モルトマンはナジアンゾスのグレゴリウスが三位一体の神の姿を孤独な個人と理解せず、交わりと理解したことに高く評価している。しかしモルトマンによれば一つの核家族を神の姿と見るということは範囲の狭い思考である。むしろ神の姿は幅広い意味で男と女との交わりにおいて、また両親と子供という世代間の交わりにおいて存在する。男と女は空間における共同体的特性を持ち、両親と子供は時間における共同体的特性を持つ。モルトマンによれば真の神の姿は「男と女の間の、そして世代間の交わり⁽⁴⁷⁾」である。

(2) イエスのアッパ (Abba) 啓示と父権制でない父

モルトマンによればキリストの十字架の死において父なる神は彼の子の十字架の死を楽しむ残忍な父ではなかった。子の死が父を満足させたというアンセルムス (Anselm) の満足説は十字架の出来事を完全に説明した理論ではない。モルトマンによれば父は子において、子と共に苦しめられた。それゆえ十字架は父の心の奥底にあり、子は父の心の奥底で叫びながら死んでいった。十字架は子の苦難でありかつ父の苦難であった。十字架は父なる神がどれほど慈悲の神であるかを明確に啓示した出来事であった。父なる神は天上の暴君でも天上の冷たい支配者や裁判官でもなく、極めて慈悲深い父であったのである。

イエスのアッパ (Abba) 啓示はモルトマンによれば、この極めて慈悲深い父の啓示であった。「アッパ、愛する父」はイエスにおける神の国の啓示の中心であり、イエス・キリストの父がどんなお方かを明らかに示した決定的表現であった。⁽⁴⁸⁾ 私たちの主イエス・キリストの父は天上の独裁者やゼウスのような神、厳しい裁判官とは何も関係がない。罪人を罰し、怒りを振る舞い、世を自分勝手に振り回す神はイエス・キリストの父からはるかに遠い。私たちの主イエス・キリストの父は人間とこの世を生かすために死ぬ苦しみを受けた極めて慈悲深い神であったのである。

モルトマンによれば女性神学者たちの父権制の父のイメージに対する批判と挑戦はかなり妥当な部分もある。多くの女性たちが、「私は神を父と呼べない」あるいは「私は私たちの父に祈れない」と言っている。しかしモルトマンによればこのような批判は、父なる神に対して伝統的に伝わってきた誤った神のイメージと深く関わっている。父なる神は天にある権威の神ではなく、極めて慈悲深い私たちの主イエス・キリストの父である。モルトマンは女性神学者たちが父なる神を母なる神と呼ぼうとする心を十分理解している。しかしモルトマンは神を母と称することより、イエス・キ

リストの父の眞の姿を知ることが解決の道だと認識している。イエス・キリストの父は慈悲と愛の神であつたのである。

モルトマンによれば今日の西欧社会の大きな危機の一つは、父の不在である。伝統的で権威主義的な父は女性運動の発展と共に追い出され、西欧社会の家庭では古い父はなくなつてしまつた。しかしながら権威主義的で支配する父がなくなつたということは良い発展だと見るにしても、子供たちの面倒を見、責任を担う眞の父が家庭から去つてしまつたということである。モルトマンは家庭でのこの父の不在を三位一体神学から解決しようと試みている。すなわち、父なる神を正しく理解することが家庭での父の不在の問題を解決する道だと見ている。モルトマンによれば父なる神に相應する地上の神は、支配する暴力的父ではなく、慈悲と愛の父である。

(3) 社会的三位一体論と三位一体的共同体

モルトマンによれば「三位一体は社会的プログラムである」。「三位一体は社会的プログラムである」という言葉は、ドストエフスキーの友人ニコラス・フェードロフ (Nicolas Fedorov) がロシア皇帝の独裁政治とクロポトキン (Kropotkin) の無政府主義の間を仲裁するために、三位一体神学から第三の道を求めたことに由来する。⁽⁴⁹⁾ 彼は、一人独裁と無政府的混乱の間における三位一体的共同体が眞の人間の社会的模範と見ている。モルトマンによれば君主的唯一神論は一人の神—一人の皇帝—一つの国家と繋がる一人の皇帝の君主的統治の根源として用いられる。これは教会の政治体制における一人の神—一人のキリスト—一人の監督—一人の教皇—一つの教会と繋がるような、一人の教皇と監督の教権的統治と等しい。モルトマンによれば君主的唯一神論は一人の皇帝の君主的統治と、一人の教皇の教権的統治の根源として用いられた。これは多様な国家と多様な共同体の可能性を危うくするもので、三位一体の神の社会的交わ

りとは根本的に遠い。

モルトマンによれば三位一体神学に基づいた教会の姿は兄弟姉妹の自発的交わりの共同体である。この共同体は多様な賜物を持つ者で構成される。この共同体には支配と従属の秩序のない相互の愛の交わりが基礎となる。一人教皇と一人監督と司祭が支配するカトリック教会の教権的支配構造は三位一体の神の真の姿を投影した共同体ではない。

三位一体の神の真の姿に相応する社会、政治秩序は君国主義でも独裁主義でもなく、民主主義的社会である。そしてモルトマンによれば独裁体制が間違つたように、西欧社会に広がっている個人主義も間違いである。個人主義は交わりがなく、孤独な人間を作ること、三位一体の神の姿が真に投影されている秩序ではない。しかし各個人の自由と主体性を犠牲とする共産主義も、三位一体の神の姿に相応する体制ではない。御父、御子、聖霊なる神は自分の独自性を維持しつつ、互いの中に深く浸透しておられる神である。モルトマンによればこの三位一体の神の交わりに相応するものは、「個人の人格と主体性が尊重される社会主義 (personaler Sozialismus) あるいは、「社会主義的個人主義」(sozialistischer Personalismus) である。⁽⁵⁰⁾モルトマンによれば一神論と西欧の個人主義は相互に結合した思惟構造であり、三位一体の神の相応する社会体制は一神論的思考の投影した個人主義でもなく、個人の人格性と主体性が共同体において瓦解した共産主義でもなく、個人の人格性と共同体性が同時に重んじられる社会主義的個人主義、あるいは、個人の自律が尊重される社会主義である。

六、結び

モルトマンの三位一体論は社会的三位一体論である。モルトマンの三位一体論を、御父と御子と聖霊が相互に深い愛

のペリコレスを通して共に住み、相互浸透し住みつつ一つとなる神の生を表現する教理と見なした。モルトマンによれば三位一体論は神の生の姿を最も表現している立派な教理である。

モルトマンの社会的三位一体論は三神論ではない。モルトマンの三位一体論を三神論と批判する人々は、大抵一神論の異端か人神論的思想に染まっている。モルトマンの三位一体論が今日の我々に三神論的傾向を持つものと見える理由は、テルトウリアヌスとアウグスティヌスを経て発展した西方教会の三位一体論が、神は一つであるという大前提を持つ一神論的傾向の三位一体論であつて、我々がこの伝統に深く結びついているからである。しかし東西教会が共に告白し世界教会の最も重要な正統信条であるニカイアーコンスタンティノポリス信条（三八一年）が一神論と対立している信条だということを我々は記憶すべきである。ニカイアーコンスタンティノポリス信条の光を照らして見ると、モルトマンの言う三位一体論は正統性の立証を受けられるが、テルトウリアヌスとアウグスティヌスの三位一体論は深刻な問題点が現れるであろう。

モルトマンの社会的三位一体論はニカイアーコンスタンティノポリス信条を作った東方教会の三位一体論の正統神学者たちであるカッパドキアの神父たちの三位一体論に基づいており、聖書に根を下ろしており、さらにはイエス・キリストの働きにその根拠を持っている立派な三位一体論である。三位一体論を人間社会の多方面に適用する具体的問題はこれからさらに議論する必要があると思われるが、モルトマンの三位一体論の基本構造と骨組みは正しく形づくられた聖書のかつ正統神学的だと評価すべきであろう。

原注

- (1) J. Moltmann, *Trinität und Reich Gottes*, (München: Kaiser, 1980). [土屋清訳『三位一体と神の国』新教出版社、一九九〇年を参照されたこと]。
- (2) J. Moltmann, *In der Geschichte des dreieinigen Gottes* (München: Kaiser, 1991).
- (3) J. Moltmann, *Trinität und Reich Gottes*, 153-4. [邦訳では「一つの実体―三つの位格」と訳されている。『三位一体と神の国』、二二〇頁]。
- (4) *Ibid.*, 154-61. [邦訳『三位一体と神の国』、二二二―二四五頁]。
- (5) 神の三つなることと三つの神々 (3 gods) があるという言葉は、東方教会神学では根本的に異なる言葉であった。東方教会神学は神の三つなること (3 hypostasis) を度々強調したが、三つの神々に関する教理は教えていなかった。なぜなら、三位の神は一つに現れ、一つだからである。一体のない三つの神々に関する教理は、東方教会神学においても徹底的に異端であった。
- (6) J. Moltmann, *Wege und Formen Christlicher Theologie*, [以下は次の邦訳を用いている。沖野政弘訳『神学的思考の諸経験』、新教出版社、二〇〇一年、三七七頁]。
- (7) G. Greshake, *Der dreieine Gott. Ein trinitarische Theologie* (Freiburg: Herder, 1997) を参照せよ。G. Greshake, *An den drei-einen Gott glauben* (Freiburg: Herder, 1996). Carl Schmitt, *Politische Theologie: Vier Kapitel zur Lehre von der Souveränität* (Berlin: Duncker & Humboldt, 1979). [韓国語では「셋이면서 한 분이신 하나님」となっているが、訳語は邦訳に従う。前掲『神学的思考の諸経験』、三七七頁]。
- (8) 前掲『神学的思考の諸経験』、三七七頁。
- (9) 同上書、三九一頁。

(10) J. Moltmann, *In der Geschichte des dreieinigen Gottes*, 『신건영 『삼위일체와하나님의역사』「三位一体と神の歴史」』(서울「ソウル」: 대한기독교서회「大韓基督教書會」, 一九九八年), 一六一—一七頁「原文で韓国語訳が用いられているため、以下、原文通りに表記する」。(Cf. J. Moltmann, *History and the Triune God: Contributions to Trinitarian Theology*, (Trans. By John Bowden), Crossroad, 1992).]

(11) 前掲『神学的思考の諸経験』, 三八七—三八八頁。「韓国語と日本語の訳のニュアンスが異なっているので、ここで韓国語から直訳しよう。「各人格体は自分の外にある異なる二つの人格体の内に存在する。それは完全な愛の力であり、この愛の力によって各人格体は自分を離れて他の人格体の内に全的に存在する。逆にこれは次のことを意味する。すなわち、三位一体の各人格体は人格体(Person)であるのみでなく、同時に他の二つの人格体に対する生の空間(Lebensräume)を表していることを意味する。各人格体はペリコレシスのな生において他の二つの人格体に対して自分を「住むことができるように」、他の二つの人格体の広い空間と住処を用意する。彼らの循環的居住(circumsessio)の意味がここにある。それゆえ我々は三位一体の三つの人格体についてのみ言うのではなく、彼らが互いの内に存在する三位一体の三つの空間についても言うべきである。……彼らは自分を渡すと同時に他の二つの人格体を受け容れつつ存在する。神的存在は個人的個体(Da-Sein)でありながら社会的な共同存在(Mit-Sein)であり、ペリコレシ的に理解されうる相互浸透的ー存在(In-Sein)である」。

(12) 同上書, 三八八—三八九頁。「以下、韓国語からの直訳である。「彼らの無我的愛の力によって三位一体の各人格体はお互いに自分自身に戻る。御父は御子と聖霊において自分自身に戻り、自分自身を意識する。御子は御父と聖霊において自分自身に戻り、自分自身を子と認識する。聖霊は御父と御子において自分自身に戻り、自分自身を意識する」。

(13) 同上書, 三八九頁。

(14) J. Moltmann, 『삼위일체와하나님의역사』「三位一体と神の歴史」, 一一頁。

(15) J. Moltmann, *Der gekreuzigte Gott* (München: Kaiser, 1972).

(16) L. Boff, *Der Dreieinige Gott* (Düsseldorf: Patmos, 1987).

(17) M. Volf, *Trinität und Gemeinschaft* (Neukirchen: Neukirchener, 1996).

(18) G. Greshake, *Der dreieine Gott*, 168—71.

- (19) 前掲『神学的思考の諸経験』、四七〇—四七一頁。
- (20) N. G. Zinzendorf, *Hauptschriften II* (Hildesheim: 1963), 33—4.
- (21) J. Moltmann, 『삼위일체와 하나님』의 역사 「三位一体と神の歴史」、『一四〇頁。
- (22) *Ibid.*, 62.
- (23) *Ibid.*, 64.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, 65.
- (26) *Ibid.*, 16.
- (27) *Ibid.*, 15.
- (28) *Ibid.*
- (29) *Ibid.*
- (30) *Ibid.*, 139. 聖靈の女性「とらう」性については次の本を参照せよ。E. Moltmann-Wendel, *Die Weiblichkeit des Geistes* (München: Kaiser, 1995).
- (31) *Ibid.*, 141.
- (32) *Ibid.*, 14.
- (33) E. Moltmann-Wendel / J. Moltmann, *Humanity in God* (London: SCM Press, 1984), 101.
- (34) *Ibid.*, 103.
- (35) J. Moltmann, 『삼위일체와 하나님』의 역사 「三位一体と神の歴史」、『一四〇頁。
- (36) J. Moltmann, *Trinität und Reich Gottes*, 195. 「前掲『三位一体と神の国』、二八九—二九〇頁」。
- (37) R. Bauckham, *The Theologie of Jürgen Moltmann* (Edinburgh: T & T Clark, 1995), 168.
- (38) *Ibid.*
- (39) J. Moltmann, 『삼위일체와 하나님』의 역사 「三位一体と神の歴史」、『一六〇頁。
- (40) *Ibid.*, 61.

- (41) Ibid.
- (42) Ibid., 62.
- (43) Ibid.
- (44) Ibid.
- (45) Ibid.
- (46) Ibid., 61.
- (47) Ibid.
- (48) Ibid., 42–52.
- (49) 前掲『神学的思考の諸経験』、四〇一頁。
- (50) J. Molmann, *Trinität und Reich Gottes*, 216–7. 「邦訳では、『社会的人格主義ないし人格的社会主義』となっている。前掲『三位一体と神の国』、二二〇頁」。